

北京缸瓦市教会と宝広林

——老舎の関わった教会のその後——

高橋 由利子

老舎は1922年に北京缸瓦市教会で洗礼を受けたキリスト教徒であった。彼は当時イギリスロンドン会が運営していたその教会を中国人の自主独立教会にするため、エヴァンス（ロンドン会派遣牧師 Robert Kenneth Evans）と宝広林（中国人牧師）と共に積極的に活動し、その教会の規約を起草し、それを自主独立教会発足の経過報告とともに発表した。¹⁾

その後、老舎はロンドン会の人脈を通してロンドン大学東方学院の中国語教師の職を得たため、1924年に渡英し、中国を離れた。²⁾ 筆者は老舎が深くかかわった北京缸瓦市教会がその後どうなったのかということについて興味を持ち、イギリスで研修した機会に関係資料を探したところ、北京缸瓦市教会と宝広林についての当時の資料を集めることができた。³⁾

本論文はそれに基づき、老舎がイギリスに行ってから中国に戻ってくるまでの北京缸瓦市教会と宝広林について解明できた事実を述べ、あわせて、そのことが老舎にどのような影響を与えたかについて考究するものである。

1. 北京缸瓦市教会の歴史

老舎が書いた経過報告によると、北京缸瓦市教会は1923年1月23日に中国人の自主独立教会として発足した。ではそれが正式に中国人の教会になる前は一体どのような状態であったのだろうか。またこのような自主独立教会は北京の中に他にあったのだろうか。

ロンドン会が1914年に発行した *Handbook of the China Mission* によると当時の中国におけるロンドン会の活動は以下の通りである。⁴⁾

「活動地域： North China, Central China, East China, Fukien, South China の5つ。それぞれの地域に Head Station があり、Peking は North China の4つの Head Station のうちの1つ。」⁵⁾

「Peking の教会：East City (东城) と South City (南城) に church があり、Tung Chih Men (东直门) に chapel があり、この3つの教会が連合されて、一つの Independent Church (自主独立教会) を形成している。」⁶⁾

缸瓦市は West City (西城) にあるが、その状況については：「西城での活動は派遣宣教師の保護の下に、chapel keeper が補佐して行われ、教会員は89人、洗礼を受けた子供は51人である。その他のスタッフとして女性伝道者一人、薬剤師二人、薬剤助手二人がいる。Chapel は毎日の説教の他、(付設診療所の) 男性外来患者の待合室として使われ、(その診療所は) 別棟の女性外来患者との合計で毎日80人から100人の利用者がある。入院設備は無い。小規模の男子学校および信徒等のための聖書クラスが日曜学校の活動の他に行われている。献金額は155ドル。」

とあるので、West City には chapel があり、それなりの教会活動をしていたが、まだそれは「派遣宣教師の保護の下であり (under the care of an evangelist)」自主独立教会ではなかったことがわかる。実際、この後、この West City の教会が発展、拡充されて、Independent Church つまり老舎がその規約を起草した缸瓦市教会へと発展していくのであるが、そのプロセスについてはロンドン会の別の資料の中にその記述がある。以下箇条書きにすると：

1918. 3. new building in the West City のプランが承認される。⁷⁾

1921. 1. new Church in West City のために20000ドルの支出が承認される。⁸⁾

1922. 6. West City Church の property について、District or Provincial Church Council の同意を経て、中国人の教会の信託とするよう要請がなされる。⁹⁾

これによって、従来 chapel しか無かった West City に中国人の自主独立教会移行含みで、新しく教会の建物がロンドン会によって建てられたことがわかる。これらは主にロンドン会の計画と予算の面から見た教会拡充の動きである

が、では実際、いつ新しい教会が建ったのであろうか。これについては、1923年1月のロンドン会宣教師夫妻の講演記録の中に言及されている。次に引くのはそのうちの夫人の方の話である。¹⁰⁾

「缸瓦市教会：嬉しいことに、北京の西城の新しい教会の建物が完工し、九月中旬には使えるようになります。450席ある階段状のホールも広く立派で調度も趣味が良く簡素です。」

「先ほどスタッキー博士（夫の方の宣教師で、North China 地域の Secretary）が馮玉祥將軍について言及しましたが、その馮玉祥將軍の一部隊が北京の西城に駐留しています。その部隊の将校が Mr. Pao Kwang Lin にこの缸瓦市教会を彼らが北京に駐留している際の church home として使わせてほしいと申し入れてきました。Mr. Pao は彼らのために日曜礼拝を朝8時半に設定しましたが、その日曜礼拝には二回続けて700人から800人が詰めかけたため、3回目からは礼拝時間を短縮して1日2回、1時半から2時半と2時半から3時半に設定し直しました。そのどちらの時間も満員の盛況で、彼らは皆各自自分の聖書を持参し、敬虔な態度で、賛美歌も心がこもっています。Mr. Pao と彼のスタッフは熱心に働いており、私達はこの教会が北京のこの地域の光となってほしいと考えています。」

この記述により新しい缸瓦市教会の建物が1923年1月にはすでに完成し、9月中旬から使う運びになっていたこと、またそれが正式に使われる前に、当時クリスチャン・ジェネラルとして知られていた馮玉祥の部隊が北京駐留時にこの教会を使ったことがわかる。

またここにでてくる Mr. Pao Kwang Lin は、本論当初に老舎とともに自主独立教会設立に努めた宝広林（中国人牧師）であり、ここでの記述から彼がすでに当時教会の中心的存在であったことがわかる。

2. 当時の缸瓦市教会の活動状況

前章では教会が建てられるまでのプロセスを跡付けたが、ここでは教会が具体的にどのような活動を行っていたかについて、検証する。これについても、やはりロンドン会の1922年から1923年の資料の中に Written by K. L. Pao と明記された A report of the Gang Wa Shih Church for last two years と題する文が見つかった。¹¹⁾ これは前述の宝広林の手になる最近2年間の缸瓦市教会の活動報告書であるが、以下それを引用しながら自主独立教会とはどのようなもので、どんな活動をおこなっていたかを見ていこう。

A: 自主独立 (Independent) の定義

“To be Independent is not meant in the sense that it will cut itself away from all former connections with the mission or stand alone from all other churches. It means self-support, self-government, and self-propagation, in short self-living.”

これは特に新しい見解ではないが、宝広林は他の自主独立教会より先んじている点として、教会の会務だけでなく the mission (ロンドン会) の仕事も一部を引き継いだと述べている。以下は各項目に分けて抄訳する。

B: 自主独立教会の財政と信徒数

毎月280ドルの収入があり、これは2年前に比べると180ドルの増加である。教会は7人の職員と6人の英語夜学の教員、門番1人、管理人1人、補助員1人を雇っている。信徒数293人、そのうち70が子供、残りが成人信徒である。この2年間に92人の新しい入信者があった。

C: 自主独立教会の活動

宝広林は社会奉仕 (community service) グループの活動として、以下の3つをあげている：

a. 福利衛生

社会福利、健康増進に関する社会教育活動を必要に応じて定期的に行ってい

る他、毎年4月に公衆衛生運動を実施している。無料ワクチン、蠅撲滅、雌蠅の買い上げ、ピーター博士の公衆衛生著作配布、新聞に大衆向けの健康記事を載せることなどがその内容である。我々に協力してくれる新聞が60以上ある。

b. 冬季貧民救済

126人の富裕信徒やその協力者から348.69ドルの現金と790点の衣類を寄付があった。瀋陽の張作霖将軍は去年の冬に1000石の穀物を寄付してくれた。これにより西城の5004家族の貧民を救済することができた。

c. 学校教育

貧しい子供達や婦女子のために小学校と職業学校を運営している。小学校は6学年、男女150名の生徒数で、5人の正規教育を受けた教員が教えている。教育の機会均等をモットーとし、教科書、授業料は無料である。毎年の維持費は1500ドルである。職業学校はその製品を売ることによって、経費をカバーしつつある。

以上の抄訳の中で注目すべき点は、福利衛生の中で北京の60以上の新聞社との提携関係について述べた個所、又、貧民救済の中で張作霖から多大の現物寄付を受けたとする個所である。これらは先に、馮玉祥の部隊に礼拝の場を提供したこととあわせて、この教会の社会的なバランスのとり方が窺われる点で興味深い。また学校教育の中で職業学校は収支が合いつつあると述べられているのに、小学校の方は維持費については触れても、その収支には触れていない—つまりどこからお金がでていくか明言していない(当然ロンドン会と思われるが)点が気になる点である。

以上で教会活動の概要についてはある程度理解できた。しかしひとつわからない点は、この教会自身を取り仕切っている宝広林の給料が一体どこから出ているのだろうかということである。彼はロンドン会の派遣伝道者名簿¹²⁾には名前が無いので、ロンドン会直属の牧師ではない。だからこそ自主独立教会の中心人物となり得たのである。では彼は一体ロンドン会とどのような関係にあり、どうしてこれほどの活躍をすることができたのだろうか。次にこの点につ

いて見ていこう。

3. 宝広林

ロンドン会の資料の中には宝広林の地位および報酬についての記録が残っているが、それはいずれも宝広林の特別の働きに対しこれだけの特別報酬を与えようという記録である。以下に列挙する。

1920. 4. 7.

- (a) Mr. Pao Kwang Lin に北京西城の教会に関する伝道の仕事につくよう要請する。我々（ロンドン会）は彼の神学教育に携わりたいと言う希望を理解するが、今この教会は強力な指導者が必要で、Mr. Pao はそれにふさわしく、中国人の教会の発展のために全力を尽くしてくれることを確信する。また同時に、「キリスト教学生連合」、「社会奉仕宣伝部」、西城の上流階級の中での仕事などの分野でも彼の能力は発揮されることであろう。
- (b) 前述 [2] に記した中国人の給料に関する原則に則り、また他の中国人教会の給料の額も参考にした結果、Mr. Pao Kwang Lin には一ヶ月 40 ドルの給料と住宅を支給するが、それには教会の寄付とロンドン会の助成金をあてる。¹³⁾

この記録から宝広林はその能力を見込まれ、ロンドン会から一ヶ月 40 ドルの給料と住居を提供されて、缸瓦市教会をしっかりと中国人の教会とするよう委託されたことがわかる。

これを出発点として、宝広林は着実に階段を上って行くのであるが、以下は要点のみ箇条書きに述べる：

1922. 11. 6—7.

向こう 2 年間、年間 \$ 480 が Minister of Kang Wa Shieh Church である Mr. Pao の給料に加算されることが承認される。¹⁴⁾

1923. 4. 25.

北京缸瓦市教会と宝広林

年間 \$ 480 の Mr. Pao の給料への加算が 1923 年-1924 年について承認される。¹⁵⁾

1924. 3. 25.

Mr. Pao Kuang Lin が Mr. Hubbard に代わり the Board of Managers of Peking Christian University に指名されたことが報告される。¹⁶⁾

1924. 2. 7.

向こう 2 年間、\$ 480 の Mr. Pao の給料への加算が請求される。¹⁷⁾

1925. 7. 14-17.

1 年間の \$ 480 の Mr. Pao の給料への加算が認められる。¹⁸⁾

1926. 2. 12-19.

缸瓦市教会の執事の要請に応え、毎月 \$ 120 の助成金が Mr. Pao の給料として認められ 1925 年 10 月から 1927 年 3 月までが教会の会計係に支給されることが承認される。¹⁹⁾

1926. 12. 14.

1927 年 3 月 31 日から 1 年間の Mr. Pao の給料 (一ヶ月 80 ドル) が承認される。²⁰⁾

1926. 10. 30.

Mr. K. L. Pao が缸瓦市教会への 6 年間の奉仕の疲れにより休養を願い出たことを考慮し、Mr. Pao に 1927 年 3 月 31 日から 6 ヶ月間の休暇をあたえること、また Mr. Pao に対し 1927 年 3 月 31 日から 1 年間の特別給与 \$ 2400 が承認される。²¹⁾

1927. 2. 5-12.

缸瓦市教会は現在使われていないロンドン会経営の女子学校および男子学校の校舎を、その経営する 2 つの学校 (Ming Hsien School および P'ing Min School) の校舎として使用することが承認される。²²⁾

the Peking Federation of Churches (北京の 4 つの教会—米市教会, 珠市口教会, 缸瓦市教会, 寛街教会の連合組合) が手紙で、Mr. K. L. Pao を 1927

年4. 1. から連合組合の Superintendent に任命したことを報告し、前に the Board が認めた Superintendent のための経費（一ヶ月 \$ 100 を3年間）を連合組合に支給してほしいと書いてきたことを受けて、会計部に支払いが求められ、また、連合組合に組織の進展状況についての年間報告書のコピー提出が要請される。²³⁾

1927. 4. 29.

缸瓦市教会付設の学校がロンドン会経営の女子学校の建物に移ったことにより、缸瓦市教会の敷地内の建物に空きができ、教会の pastor の住居が確保できるようになった。そのため、従来 pastor の住居として使われていた磚塔胡同の家が空いたので、そこを the Peking Federation of Churches の Superintendent の家としてあてることが承認される。²⁴⁾

以上の記述は承認機関のレベルの違いにより、いくつかの重複を含んでいるが、これらから推測される宝広林へのロンドン会からの給与は次の通りである：

1922年から1925年 一ヶ月40ドルプラス40ドル、合計80ドル。

1925年10月から1927年3月 一ヶ月120ドル。

1927年3月31日から1年間（予定）一ヶ月80ドル。

（以上はいずれも缸瓦市教会の Pastor として）。

1927年4月1日から3年間（予定）一ヶ月100ドル。

（北京教会連合組合の Superintendent として）。

結局1920年の一ヶ月40ドルが1922年-1925年は80ドル、1925年-1927年3月は120ドル、また1927年3月31日以降は教会と組合から合計180ドルということになる。

しかも1927年3月31日から六ヶ月缸瓦市教会の pastor 職を降りることを認められた上、1年間2400ドル（一ヶ月200ドル）の特別給与が承認されている。

さらにその上、缸瓦市教会経営の小学校に対し、ロンドン会経営の学校の校舎設備を貸したり、従来宝広林が教会の Pastor として住んでいた家を、こんどは組合の Superintendent として引き続き住むことを認めている。

北京缸瓦市教会と宝広林

このような宝広林への待遇は彼の北京におけるキリスト教活動が高く評価されていたことを反映している。しかしながら彼のこの生活は 1927 年 8 月に北京で起こったある事件によって、大きな頓挫をきたすことになる。それは同時にまた彼が老舎やエヴァンスとともに作り上げた缸瓦市の自主独立教会の頓挫でもあった。

以下その事件について、やはりロンドン会の資料に基づき見ていくことにする。

3. ロンドン会の極秘報告書

これはロンドン会の本部の Foreign Secretary である F. H. Hawkins によって書かれた関係者あての秘密文書である。²⁵⁾ 彼は本部の責任者として、ロンドン会の派遣先から現地の会議や報告、手紙を受け取って指示を与える一方、派遣先にも出張視察し、情報を集め、全体を統括していた。

彼は North China 地域の責任者からの会務延期の電報と、北京の新聞が “the arrest of Mr. Pao Te-Hao, the Secretary of the Kang Wa Shih (West City) Church, Peking, and other people, and the seizure of a quantity of arms and ammunition on the Church premise” を報じたという情報から北京の缸瓦市教会をめぐる異変をキャッチし、調査すると同時に、現地関係者からの報告も受け、中国で指示を出し、事態を收拾した。

この秘密報告書はその経緯について書かれたものであるが、その重点はこの政治的事件に対する宝広林の責任追及と、彼の今までのやり方に対する批判にある。そのため、前文でこの報告書を絶対に中国人に漏らさないよう特に強調している。これによって、我々は順風満帆に見えた宝広林に対する別の見方を知ることができる。以下この報告書の概要を記すが、その前に 24 ページにもわたるこの報告書の題目と見出しを原文で示す。

CHINA MISSION CONFIDENTIAL REPORT of Mr. F. H. Hawkins on various matters arising in connection with his visit to China, August 1927–March 1928

FORENOTE.

I. INTRODUCTION.

II. The Dramatic Personae and Places and Organizations referred to.

- (a) PAO KWANG-LIN
- (b) Mr. PAO TE-HAO
- (c) The KANG WA SHIH CHURCH
- (d) THE MI SHIH CHURCH
- (e) THE FEDERATION OF PEKING CHINESE CHRISTIAN CHURCHES

III. Newspaper Report.

IV. Report from Mr. Dewson and Miss Greaves.

The Arrest. Kang Wa Shih Church. Country Field. Ping Min School. Ming Hsien School. Note. Mr. Pao Kwang-Lin.

V. SUBSEQUANT DEVELOPMENTS.

VI. THE FUTURES.

ここに書かれていることの概要を記すと以下の通りである。

宝広林はイギリスの大学を卒業した後、約7年前から北京缸瓦市教会の Pastor となり、有能であったためすぐ有名になり、各分野に勢力を広げた。彼はまた元ロンドン会の学校であった二つの学校の責任者でもあった。しかし彼の神学が進歩的であると不満を持つものも多く、教会の日曜礼拝の内容が政治的すぎるとの不満や、彼の説教がキリスト教より三民主義に傾いているとの不満もあった。

今回の事件の中心人物の Mr. PAO TE-HAO はもと兵士でロンドン会を通して南京の神学校を終えたあと、1922年2月から北京周辺地区で preacher をしていたが、1925年にこの地区をロンドン会が缸瓦市教会に移管した時、宝広林の assistant となった。このため宝広林はより外的活動ができるようになった。宝広林が教会組合の Superintendent になり教会の仕事を降りたため、Mr. PAO TE-HAO は缸瓦市教会の実質的責任者となった。教会は彼を Pastor とは

せず、Secretary としたが、彼は実は Pastor になりたがっていた。

PAOTE-HAO は 1927 年 8 月 8 日に内偵していた警察に路上で逮捕され、その後缸瓦市教会敷地内の建物と北京周辺地区の教会関係の建物が搜索され、大量の手紙、文書が銃とともに押収され、PAOTE-HAO を含む何人かが逮捕された。この日を境に宝広林、宝広林の秘書、缸瓦市教会の会計係、経営する 2 つの学校の責任者や会計係などが失踪した。

調査の結果、教会と 2 つの学校の経理に不審な赤字や借金が見つかり、また学校の部屋を利用した政治集会や秘密集会が開かれていたことが判明した。宝広林や学校責任者は集会に出席しており、宝広林は失踪する前に特別な鍵のつけられた集会室の壁を大工に壊させて大量の文書を処分した。

缸瓦市教会責任者や学校責任者の逮捕、失踪により、教会と学校の経営は麻痺状態に陥ったが、ロンドン会関係者と教会幹部や有志の信徒が、会議を開き、臨時の責任者を決めて、收拾にあたり、一部の活動は休止中であるが、何とか通常の状態に戻った。

宝広林は手紙を友人に托し、自分が事件とは無関係であると主張したが、それはロンドン会関係者の数々の疑問を解決するものではなかった。

私 Hawkins は宝広林がこれらの政治的活動を知っていたとしたら勿論のこと、たとえ知らなかったとしても、統括者としての責任は免れないと考え、また、宝広林が 8 月 8 日以降失踪して教会組合の Superintendent の職務を放棄したと考えて、教会組合に対する Superintendent への助成金を 10 月から停止する手紙を組合議長あてに送った。

しかしながら、組合議長は、宝広林から 9 月、10 月の二ヶ月間の休職願いが送られ、受理されていたこと、また 8 月は通常の夏休み期間で職務放棄にはあたらないとし、教会組合の活動を停滞させないため、助成金の継続を願い出た。何通かの手紙のやり取りの後、私 Hawkins はロンドン会と教会組合の関係を悪化させないためと、残された宝広林の家族の生活を考慮して、もともと一ヶ月 200 ドルの助成金を 50 ドルに減額して継続することにした。

中国の新聞情報では PAOTE-HAO は馮玉祥の命を受け、張作霖に対抗する

べく活動していたとか、宝広広林は馮玉祥のエージェントであったとの説が流れたが、宝広林はそれを否定している。また宝広林の友人は PAOTE-HAO は国民党の inner circle にいて、共産党および張作霖に対抗していたが、宝広林は国民党の outer circle にいたにすぎないとするが、真相は不明である。ただ宝広林は張作霖の息子の一人に英語を教えていたことが判明している。

その後宝広林は上海に逃れて熱心な活動を展開し、「キリスト教文学協会」の仕事を得た。PAOTE-HAO は 10 月 7 日に処刑され、彼の妻も同じ日に死んだ。この事件後、しばらくは教会や学校が警察によって見張られると言う事態があったが、結局ロンドン会自体は無関係であったため追求はされなかった。

この事件を通して私 Hawkins が得た反省は、ロンドン会は宣教師を北京から撤退させたため一種の真空状態が起きたこと、中国人の手にその仕事をあまりにも早く委ね過ぎたということである。そのため私 Hawkins は二人の中国での経験豊かなロンドン会スタッフを北京に移動させ、活動の強化にあたることにした。

以上が概要である。このような Hawkins の宝広林に対するきびしい見方は勿論宝広林の行った行動にも由来するが、実は Hawkins 自身が宝広林が教会組合の Superintendent になることに積極でなく別の人物を考えていたが、それが実現せず、従来その活動に尽力し、現地の中国人関係者に絶大の人気があった宝広林が推戴されたという事情もあった。²⁶⁾ 宝広林に対する特別の助成金も、なるべく中国人の手で自主にやらせるという方針にそって、現地中国人関係者から出された要求を飲まざるを得なかったというのが実情であったと推測される。

この報告により、中国人自主独立教会の希望の星であった缸瓦市教会が中国人の運営という点からは大きく後退し、またその中心人物であった宝広林は逃げるようにして教会から去ったことがわかった。老舎が深く関わった缸瓦市教会では、彼がイギリスに居る間にこのような大きな変動が起きていたのである。

この北京の缸瓦市教会にそれぞれの社会に対する夢を托して結束した 3 人の

うち、エヴァンスは老舎がイギリスに来てから1年足らずで死亡し、宝広林は老舎が中国に帰る2年前に以上のような経緯で北京を離れた。老舎がイギリスでこの事件のことを知っていたかどうかは確証がない。しかしながら老舎が在職していたロンドン大学東方学院はロンドン会派遣の宣教師達の外国語取得テストにも積極的に取り組む用意があったことがロンドン会の資料に残っており、²⁷⁾ この関係から事件に関する情報が入った可能性は否定できない。

老舎は1929年6月にイギリスでの教員生活を終え、帰国の途についても、すぐには中国に帰らず、ヨーロッパを周遊し、シンガポールの華僑中学で教職につき、帰国したのは1930年3月になってからである。また、5年ぶりに戻った北京にも長く滞在せず、7月には齐鲁大学の教員となって山東に赴任した。²⁸⁾ この齐鲁大学も当時のキリスト教大学であり、Shantung Christian Universityとしてロンドン会の資料にもたびたび登場する。²⁹⁾ この齐鲁大学の職を得るのにもロンドン会が絡んでいる可能性もあるが、今のところ直接それを証明する資料は見つかっていない。ただ、筆者は老舎が帰国後の定住地を彼が愛して止まない故郷の北京にしなかったのは、多少ともこの事件が絡んでいるのではないかと推測している。

注

- (1) 拙稿「老舎とキリスト教」(雑誌「中国語」1983. 6. 渡辺安代と共同執筆)参照。なお老舎の文章《北京缸瓦市伦敦教会改建中华教会经过记略》は《中华基督教教会年鉴》第7期(1924年)に発表されたが、それもこの拙稿に資料紹介として掲載。(後《老舎全集》19巻に収録)。
- (2) 拙稿「老舎の文学とキリスト教(一),(二)」 「上智大学外国語学部紀要」18号, 19号(1984. 3., 1985. 3. 副題は『老張的哲学』, 『趙子曰』と『二馬』)参照。なお老舎はエヴァンスの岳父リース(William Hopkyn Rees, ロンドン会の中国派遣牧師で、後ロンドン大学東方学院中国語の助教授Reader in Chineseとなる)を通してこの職についた。この間の経緯について筆者の2回の口頭発表がある。(《老舎和两个英国人》1994. 8. 老舎学术讨论会, 长

春。「老舎ともう一人の英国人」 1995. 7.28. 日本老舎研究会大会、関西大学。）

- (3) 筆者の研修先はロンドン大学 SOAS (School of Oriental and African Studies。なおこの前身の School of Oriental Studies が老舎の赴任したロンドン大学の東方学院)。入手資料は SOAS 図書館 Special Collection Reading Room (SCRR)、Missionary Archive のロンドン会関係資料。ロンドン会は London Missionary Society (L. M. S.)、現 Council for World Mission (C. W. M.) で、英国会衆(組合)派教会の海外伝道組織。
- (4) これも SOAS 図書館 SCRR 蔵。以下に引く資料はすべて SCRR 蔵。原文の英文を必要に応じて筆者が抄訳。
- (5) 他の3つは Tientsin, Tsangchou, Siaochang。
- (6) 同書 p. 85。なお、*The Christian Occupation of China* (1922、Shanghai) p. 381 には東直門外、東柳树井、米市大街の3つの教会が北京中華基督教教会を形成していたという記述がある。
- (7) China Committee Minutes, Tuesday&Wednesday, March 26&27, 1918, North China D. C. No. 8 (b)。
- (8) China Committee Minutes, Monday&Tuesday, January 31st& February 1, 1921, No. 3。
- (9) L. M. S. North China Committee Minutes, Tuesday, June 27th, 1922, No. 17 (c)。
- (10) Newsletter from Dr. & Mrs. Stuckey, L. M. S. Tientsin, N. China, Jan. 1923。
- (11) CWM North China, Report, box9。
- (12) Annotated Register of L. M. S. Missionaries (1796-1923)。
- (13) North China District Committee, L. M. S., Minutes of Annual Meetings held at Tientsin, April 6th to 8th, 1920, No. 3 Mr. Pao Kuang Lin。なお前掲 *The Christian Occupation of China* (1922、Shanghai) p. 383 によるとロンドン会(直隶)の中国人牧師の平均給与は一ヶ月 16.30 ドル、一ヶ月の平均生活費は 32 ドル。
- (14) China Committee Minutes, Monday&Tuesday, 6th&7th November, 1922, No.

北京缸瓦市教会と宝広林

3。

- (15) China Committee Minutes, Wednesday, April 25th, 1923, No. 3。
- (16) China Committee Minutes, Tuesday, 25th, March, 1924, No. 33 (e)。
- (17) Minutes of North China District Committee, 7th, Feb. 1924, (7)。
- (18) Minutes of North China D. C. at Tsangchow, July 14-17, 1925, 5066 salary of Mr. K. L. pao。
- (19) North China District Committee, L. M. S., Minutes of Annual Meetings held at Tientsin, Feb. 12-19, 1926, Report of Executive Committee 6018。
- (20) China Committee Minutes, Tuesday 14th December, 1926, No. 3。
- (21) L. M. S. North China District Committee, 30 Oct. 1926, Resolutions of North China Executive Committee。
- (22) North China District Committee, L. M. S., Minutes of Annual Meetings held at Tientsin, Feb. 5-12, 1927, Report of Executive Committee 7003。
- (23) 同上 7050。
- (24) Resolutions of the Executive Committee of the North China D. C. passed at a meeting on April 29, 1927。
- (25) China Committee Minutes, Thursday and Friday, 31st May and 1st June, 1928 の p. 66 と 67 の間にはさまれた 24 ページの報告書 2 つのうちの 1 つ。もう一つは中国の大学についてのもの。どちらも上に Strictly Private and Confidential. For the use of China Committee only. と記されている。
- (26) Minutes of North China District Committee, 4th. Feb. 1924, Appendix No. 7 Peking Report. なお Hawkins が一貫して強く推していたのは Dr. C. Y. Cheng (诚敬一)。
- (27) China Committee Minutes, Monday & Tuesday, 6th and 7th November, 1922, No. 9 Advisory Council for China General e. Standard of Efficiency in Language。
- (28) 老舍の齐鲁大学時については张桂兴 (山东师范大学教授) 氏の考証《老舍资料考释》修订本 (中国国际广播出版社 2000.9, 北京) p. 65-p. 133 老舍在齐鲁大学考および《老舍与第二故乡》(青海海洋大学出版社 2000.9, 北京) の詳しい研究がある。(どちらも老舍研究丛书)。

- (29) 例えば注(32)で述べたもう一つの報告書の中にも D. Shantung Christian University の項目で詳しい報告がなされている。
- (30) 本稿は2000年10月20日、北京語言文化大学で開かれた老舍シンポジウム(老舍与二十世纪中国文学研讨会)での口頭発表をまとめたものである。